巻頭エッセイ

造船業に身を置いて

矢吹捷一
三井造船株式会社

私は造船会社に勤務して今年で40年目を迎えました。永年造船事業に携わっていると気付かないことが多いのですが、我々造船に従事する者にとっては当たり前の様に感じていることが、一般には特異な商習慣であることが多々ある様です。

近世において、船舶への投資は多大な利益をもたらすか、或いは予期せぬ海難により元も子も失うか、たいへんリスクのある事業であった為に生まれた、思い入れや商習慣が現在も生きている様におもわれます。

船の建造にあたっては、起工・進水・命名や引渡しと行事や式典が多くあります。製品一つづつに船名をつけると言う工業製品としては他に例を見ない特殊性ゆえの結果ですが、船舶建造への関係者の思い入れを表す習慣でしょう。通常、起工式は建造中の安全祈願の趣旨から神事として執り行い、進水・命名・引渡しは宗教色無しに執り行っています。ところが、船主さんによっては、命名式や進水式には夫々のお国柄を反映した宗教儀式となることがあります。最近インド系の船主さんがヒンズー式の命名式を主催されました。式典の進行は日本の神道に通じるところが多く、まず神様を招き入れ、供物を捧げ、お願い事を奏上し、また神様にお帰り頂くと言う手順になっていました。ただ異なることは、夫々が専門分野を持つ108柱の神様が存在し、一方づつ招き入れる為大変な時間がかかることでした。言葉は解りませんでしたが、日本文化は唐天竺から渡来したとの説を彷彿させるような親近感を覚える内容でした。

この様な儀式や、引渡しをうけて出航して行く新造船を見送る度に、感激とロマンを感じるのは私だけでは無いでしょう。この点からは、若い人々にやりがいの有る職場として大いに推薦できると思います。

造船業は、昭和30年代後半から40年代にかけては、輸出産業の尖兵的な存在で社会貢献をしてきました。しかし、その収入の大部分をドル建て国際マーケットに支配される一方、コストは円建て国内マーケットに依存している上、契約から引渡しまで２・３年を要することと相俟って、昨今の円高環境では為替変動に大きく影響される業態となっています。２年も３年も先に引き渡す船を受注しておきながら、為替変動や原材料の逼迫・値上がりのリスクをヘッジしきれ無い商習慣も残念なものです。また、個別の商談で決まる契約船価が、一晩明けるとマーケット情報として世界中の関係者に広まっている事もある特異な国際マーケットが形成されています。

ロマンは有るが、競争が激しく業界としての発言力の弱い特異な事業環境で、オールドエコノミーの代表だの構造不況業種などとのレッテルを貼られながらも、造船業はここ数十年世界一・二のシェアを維持している稀有な産業でありますが、韓国や中国など近隣諸国の企業との競争に打ち勝つためには、そろそろ生産の効率化によるコスト削減のみでは限界に近づいています。造船企業を支える関連工業の充実度や、世界有数の海運界、規模の大きな日本の経済力を背景に持つ日本の造船事業は決して近隣諸国に劣後するものでは無いので、対抗策としての市場戦略策定が必要な時期に来ている様に思えます。

造船業も作業船業界も歴史のある業種であり、日本の社会を維持する上で必要不可欠な産業と認識しています。いずれも有能・勤勉な人材と、蓄積された技術・技能が事業基盤を支えており、伝統と歴史的商習慣をかかえて、昨今の国際化・グローバルマーケット化する環境にさらされている点で共通の課題もあるでしょう。今後両業界が国際競争のなかで今まで以上に活性化する為に、努力を続けたいものです。